

既存施設ユニットケア先進報告事例

施設名称		介護保険総合ケアセンターいずみの園																												
運営主体		社会福祉法人九州キリスト教社会福祉事業団																												
施設所在地		大分県中津市字永添2744番地																												
電話番号		0979-23-1616																												
開設年月日		1978年(昭和53年)4月10日																												
設 の   現   況	定員	100床 ショートステイ棟10床																												
	職員数	<table border="0"> <tr> <td>介護員</td> <td></td> <td>看護師</td> <td></td> </tr> <tr> <td>常勤</td> <td>34名</td> <td>常勤</td> <td>4名</td> </tr> <tr> <td>非常勤</td> <td>8名</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>(常勤換算)</td> <td>6.1名</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>スポット職員</td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>(常勤換算)</td> <td>3.25名</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td></td> <td>計47.35名</td> </tr> </table>	介護員		看護師		常勤	34名	常勤	4名	非常勤	8名			(常勤換算)	6.1名			スポット職員				(常勤換算)	3.25名						計47.35名
	介護員		看護師																											
	常勤	34名	常勤	4名																										
非常勤	8名																													
(常勤換算)	6.1名																													
スポット職員																														
(常勤換算)	3.25名																													
			計47.35名																											
人員配置割合	2.3:1																													
概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 介護老人福祉施設いずみの園 100床</li> <li>・ ショートステイサービス 10床</li> <li>・ デイサービスセンター(重介護型): ふれんど館</li> <li>・ 痴呆性高齢者デイサービスセンター: ふれあい館</li> <li>訪問入浴サービス</li> <li>配食サービス</li> <li>・ グループホーム: ベテルハウス</li> <li>・ ホームヘルパーステーション(24時間対応)</li> <li>・ 訪問看護ステーション(24時間対応)</li> <li>・ 介護保険サービスセンター</li> <li>福祉用具サービスセンター</li> <li>障害者生活支援センター: エマオ</li> <li>・ 中津市在宅介護支援センターいずみの園</li> <li>・ 大分県地域介護実習・普及センターいずみの園</li> <li>・ いずみの園医療事業部</li> <li>クリニックいずみ</li> <li>リハビリセンターいずみ</li> <li>身体障害者デイサービスセンター</li> <li>・ ケアハウス: 聖愛ホーム 50床</li> </ul>																													

<p>ユニツケアへの取り組み きっかけ</p>	<p>1997年、施設長の提案で「ケア研究会」という勉強会が始まった。この研究会で取り組まれたことは、現在のいずみの園ケアの基盤となった。ケア研究会では、介護スタッフのケアに対する意識改革や痴呆性老人専用棟におけるレクリエーション援助のあり方など、5つの研究課題が取り組まれた。施設に生活を取り戻すため、こうした小さなケアの改善が進められた。施設のハードをどうするかというよりも、施設ケアをどうするかであった。</p> <p>1998年、さらにケア単位を小人数化することが必要ではないかとの職員の気付きで、施設の中にグループホームをいくつか作れないものかと考えた。そのことがユニットケアにつながるものとなった。</p>
<p>自分達の考えるユニット ケア</p>	<p>三大介護に追われていた頃、やりたいと思いながらもできなかったケアができればと考えている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 天気がいい時、ちょっと散歩に出掛けられたら。</li> <li>・ お年寄りが寂しそうな時、ちょっと横に寄り添っていられたら。</li> <li>・ 「ちょっと待って」と言わないでいられたら。</li> <li>・ 利用者一人ひとりをもっと知りたい。</li> <li>・ 利用者の残された時間に、ゆっくり、じっくり係わりたい。</li> <li>・ 利用者のできることは、自分でできるように支援したい。</li> <li>・ 施設に温かい雰囲気と生活を取り戻し、その中で生活をしていただきたい。</li> </ul> <p>朝、昼、夕の食事の準備の中で、ご飯の匂い、お茶碗を洗う音がするようにしたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 利用者が施設で、生きてると実感してもらいたい。</li> <li>・ いずみの園に来て良かったと、少しでも思っただけなら望外の喜び。</li> </ul> <p>等々が、ユニットの中で自然に行われる。そんなケアができればと考えている。</p>
<p>改修前の施設配置図</p>	<p>別紙1のとおり</p>
<p>現状の施設配置図</p>	<p>別紙2のとおり</p>

<p>居室の状況及び設置する設備・備品</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 四人部屋もしくは二人部屋</li> <li>・ 個室がないので、プライバシーができる限り保たれるように間仕切り家具の設置をしている（ユニットになる以前より）</li> <li>・ 個人の所有物（タンス等希望に添う）</li> <li>・ テレビ</li> <li>・ ポータブルトイレ（ADLに応じて）</li> </ul>
<p>リビングルームの状況及び設置する設備・備品</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 設備 キッチン 床じゅうたん（2ユニット） パーテーション</li> <li>・ 備品 台所用品 カセットコンロ ポット レンジ 冷蔵庫 食器棚 テレビ テーブル 椅子（各種） 暖簾</li> </ul>
<p>職員に対する研修</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 全体園内研修（外部講師を招いて）毎月1回以上</li> <li>・ 外部研修（施設よりの出張命令による）</li> <li>・ 事業部毎勉強会</li> <li>・ ユニットケアに関する研修 介護課勉強会＝スーパーバイズ（ビデオを用いて） （介護課全体で月に1回・ユニット毎、個人毎に必要なに応じて実施）</li> <li>・ 他施設見学・研修</li> </ul>

## ユニットケアへ取り組むきっかけ

介護老人福祉施設いずみの園は、大分県北部に位置し、人口7万弱の地方都市である。開設して25年目を迎えた。

介護に関わるスタッフは、それまで三大介護と呼ばれる業務を中心に、利用者の生活の場所となるように努力してきた。しかし生活の場所を提供したいと思いつつも、三大介護に追われる毎が続いた。

そのような中で97年、現施設長の提案で勉強会が始まった。それは「ケア研究会」と呼ばれるものであった。この研究会で取り組まれたことは、現在のいずみの園のケアの基盤となった。ケア研究会では、介護スタッフのケアに対する意識改革や痴呆専用棟におけるレクリエーション援助のあり方など、5つの研究改題に取り組んだ。更にその翌年にはスタッフのマナー向上など4つの研究課題が取り組まれた。それら研究の考察のひとつに次のような一文がある。

「私たちが施設のレクリエーション援助に取り組んで行くうちに、普通の生活では、女性なら家族のために料理をつくり、掃除洗濯を行っているのに、施設内では殆どそれがなされていないことに気づいた。痴呆高齢者の一部は、ADLはある程度保たれているにも関わらず、家庭で行っていただろうと思われる一切のことに関わっていない。これは生活者である利用者から、生活そのものを取り去っている施設援助とすることができる。また、施設内で毎日行っているレクリエーションも家庭生活では普段、そんなに行うものではない」

高齢者には多くの余暇時間があるが、高齢者＝余暇時間＝ゲーム・歌・踊りではなく、生活そのものが余暇活動であり、ある一定の時間やゲームだけが余暇活動ではないと問いかけた。

こうした研究の中から、プロのサービス提供者として、さらに利用者が生きていると感じていただけるようなサービスとは何か、小さな改革の積み重ねが始まり、広がっていった。しかし生活の場となるにはその後、数年の時を要した。

そんな中で98年10月、一人のスタッフの「小集団でケアできたらいいですね」の一言は、大きな一歩を踏み出すきっかけとなった。そのことに対する思いは日毎に強くなったが、これはと思う考えも浮かばずにいたある日「グループホーム的ケア」はどうだろうか考えるようになった。その時点で24年を経過する施設のハードをどうするか、また業務をどう変化させるかなど課題は多くあったが、どうにかしたいという思い、やらねばならないという思いが私達スタッフを駆り立てた。

丁度その頃、「ユニットケア」のすすめという本が出版され、これは私たちがやろうとしていることと同じではないかと直感した。

2000年倉敷で開催された「第2回特養・老健ユニットケア全国大会」に参加する機会を得て、さらに自分たちのやろうとしていることに対し自信を持つことができた。そしてユニットケア化に向けて準備がなされ、今日に至っている。

いずみの園のユニットの特徴は25年経過した建物の中で取り組まれていることである。多くの施設で、ハードが整ってないから取り組めないと思っていないだろうか。25年のハードでも可能であることをお知らせしたい。ハードにおいては、いずみの園はユニットというにはほど遠いものである。しかしそれが幸いしていると感じるときもある。それはユニットでの生活感を出すために、工夫に工夫を重ねる、考動（考えて動く）するスタッフが増加しつつあることだ。少しの空間を利用した共有ホールづくりなど、スタッフの熱意なしではできなかった。

こうした方法でケアを展開するようになって1年7ヶ月が過ぎた。明らかに言えることは、施設の中が賑やかになったこと。スタッフの姿を探さなくてもそれぞれのユニットに行けば見えること。要するに利用者の近くにスタッフが居るようになったこと。忙しく動き回っていたスタッフの座る姿がみえるようになったこと。そしてその周りに利用者の姿があること。何よりうれしいことは、以前は三大介護のときにしか関われなかった重度の利用者に、今はそのユニットのスタッフがベッドのそばに椅子を持ち込み、横に座って語りかけながら、手指のマッサージ、ROM訓練、手浴、足浴、そして会話が行えるようになったことである。離床が格段に実現した。

これらのことは、三大介護に追われていた頃、介護スタッフの頭の中から離れなかったことである。つまり、やりたかったことがやれるようになり、その結果利用者の表情が明るくなったのである。

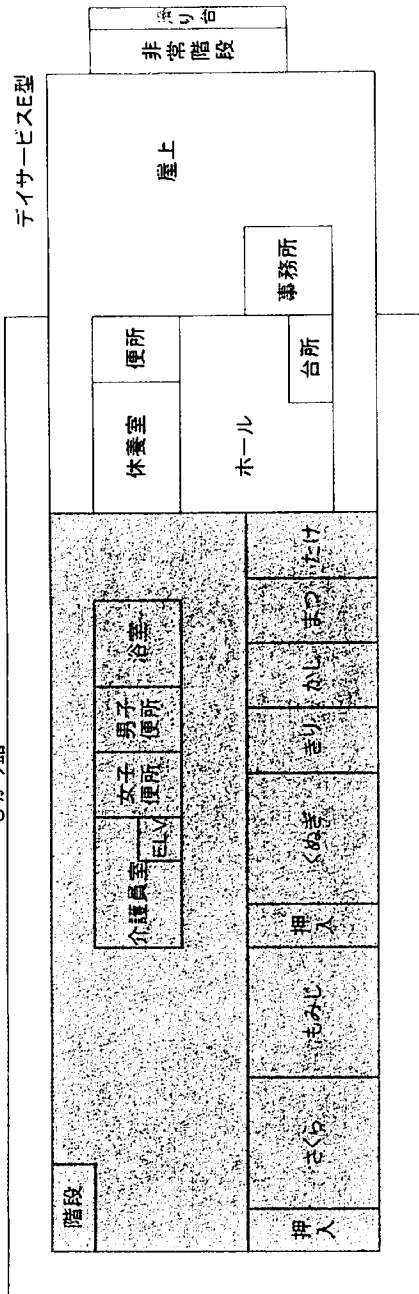
今後はさらに一人ひとりの心のサインに応えられるように、ユニットでの関わり方を学んでいきたいと考えている。そのためにはスーパーバイズは重要であり、そのスーパーバイズ研究会に参加できたことに感謝している。



# 2階

ひかり館

ディスプレイ型





# 2階

